

長屋門発掘・修復時の発見

高山家は、少なくとも1400年代以降、この地で暮らしていた。有力な侍であった高山家は、この谷の小さな村を統治した。長屋門は、高山家が侍として活躍した時代からの、唯一の現存する建造物である。高山社養蚕学校は2014年、UNESCOの世界遺産に指定された。長屋門には、大規模な修復が実施された。修理と同時に行われた考古学調査により、建物とその所有者である高山家について歴史的詳細が明らかになった。

正門の作業においては、害悪を除けるために用いる複数の祈祷札（お守りの護符）が発見された。長屋門正面左の柱において14枚の祈祷札が見つかり、その右に1枚が見つかった。最古の祈祷札は1687年のものであり、そこに記された文からは、この札が戦地での幸運のために用意されたことが示唆される。他の祈祷札にも、同じような文が書かれている。これらの遺物は、建物の築年数を知るための最古の証拠になる。

考古学者は、長屋門西側の部屋において、ある羽目板の裏の1本の木柱に落書きを発見した。この落書きは、建物が職業訓練場として使われた1887年から1925年の期間に、10代の学生によって書かれたものと思われる。

この門ではまた、反対側の一室の土間に、焼けた痕跡が見つかった。焼け跡の上部にある梁が変色していることから、この場所にはかつて、ある種の炉床のようなものが置かれていたと思われる。これは絹の生産に関連して用いられたと考えるのが最も妥当であろう。製糸前、ここで絹の繭を煮たのかも知れない。2018年、門の修復に携わる関係者の間では、この部屋が繭を乾燥する施設として用いられたことを示唆する証拠も見つかっている。